

## ソグド語の『涅槃経』の断片

吉 田 豊

京都大学文学部東洋史研究室は、3種類のソグド語資料を保管している。それらはカラバルガスン碑文の拓本、マニ教文献の古い乾板写真、そしてここに発表する文書の断片の現物である<sup>1)</sup>。

この文書は、他の2点の文書断片とともに、吐魯番出土文書という表題を持つ巻物に表装され保管されている。他の2点のうち的一方はマニ教ウイグル語文献であり、もう1点は北道のブラーフミー文字で書かれた断片である。前者は初め羽田亨によって解説されたが、最近になって森安孝夫が改めて研究し、詳細な語注とともに再発表した[羽田 1958: 325-47; 森安 1990-91: 186-99]。ウイグル語の断片は羽田によれば、「新疆省に布政使として在住した王樹柎氏の手へ歸したのであったが、その後轉輾して昨年(1929年)京都帝国大学文学部東洋史研究室の所蔵となったものである」という[羽田 1958: 325]。この断片が同じ経緯をたどったことは疑いない。しかしその後この資料の存在は忘れられ現在に至っている。筆者は、同大学に在学中にこの文書を実見し研究していたが、小断片であり原典の比定ができずにいた。最近になってようやく原典の同定に成功したので、ここにその成果を発表することにした。貴重な資料の公表を快諾された永田英正教授及び同研究室の関係者に感謝する。

正書体(formal script)で書かれたこの文書は、ソグド文字を横書きと見て、横13.7cm縦19.0cmの断片である。罫線紙を用いており、罫線の間隔は1.3cmである。この種の紙は漢文仏典の書写用であったと考えられ、敦煌出土のソグド語仏典や、ベルリンにある資料の紙質を参考にすれば、7-8世紀頃のものと思なして良いであろう<sup>2)</sup>。14行を残す本文書は卷子本の断簡で、紙幅は本来25ないし27cm程度あったはずであるから、行の半分以上が失われていることになる。体裁から仏典であることは明かである。

下にテキストを提出する。内容を検討した結果、『大般涅槃経』(『大正』12巻, No. 374: 456b)からのソグド語訳であることが判明した。漢訳からの重訳であることは、テキストの一致と、他のソグド語仏典における状況を勘案して確実である<sup>3)</sup>。上にも述べたように、テキストの残存部は全体の半分以下である。しかも下のテキストから理解される通り、定動詞形が見あたらないので、ソグド語の訳者が原文をどの様に理解していたかが分からない。従って、ソグド語の訳文のシンタックスを知る手がかりは冠詞だけであるが、それもそれほど役には立たない。そこで下ではソグド語の翻訳の代わりに、漢文の読み下し文を掲げ、テキストに対応部が残っている場合には、その箇所を下線を施しておいた。なお読み下し文は『国訳一切経』から引用した。

テキスト<sup>4)</sup>

1. [ ]wkry (w)[ ]
2. [ šyr]'krtyh 'xw s(...)r[ ]
3. [ ]p'zy 'PZY ZKw 'pw "[ ]
4. [ ]ptβr'w'k wy''k 'PZY[ ]
5. [ ](y) δy''ny tk'wš'k wy''k 'P(ZY ZKw)
6. [ ](t) wkry 'PZY ZKw γrm δrm 'PZ(Y)
7. [ ](p)r'ym δ'mwh ZKw 'prtmyk (δ)[rm]
8. [ ]h 'rt'w'spy 'PZY ZK(w) wrzry 'ntw-
9. [xs ]'PZY 'mw wyspw βyz'k [(t)[ ]
10. [ ]k' 'PZY ZKw 'št wkr[y ]
11. [ ](y) γrβy m'n 'PZY ZKw 'š(t)[ ]
12. [ ](k) 'PZY 'wy wyspy[ ]
13. [ ]pw pδr'mc s'r[ ]
14. [ ]wyspw wkry prn 't n(r)[ ]

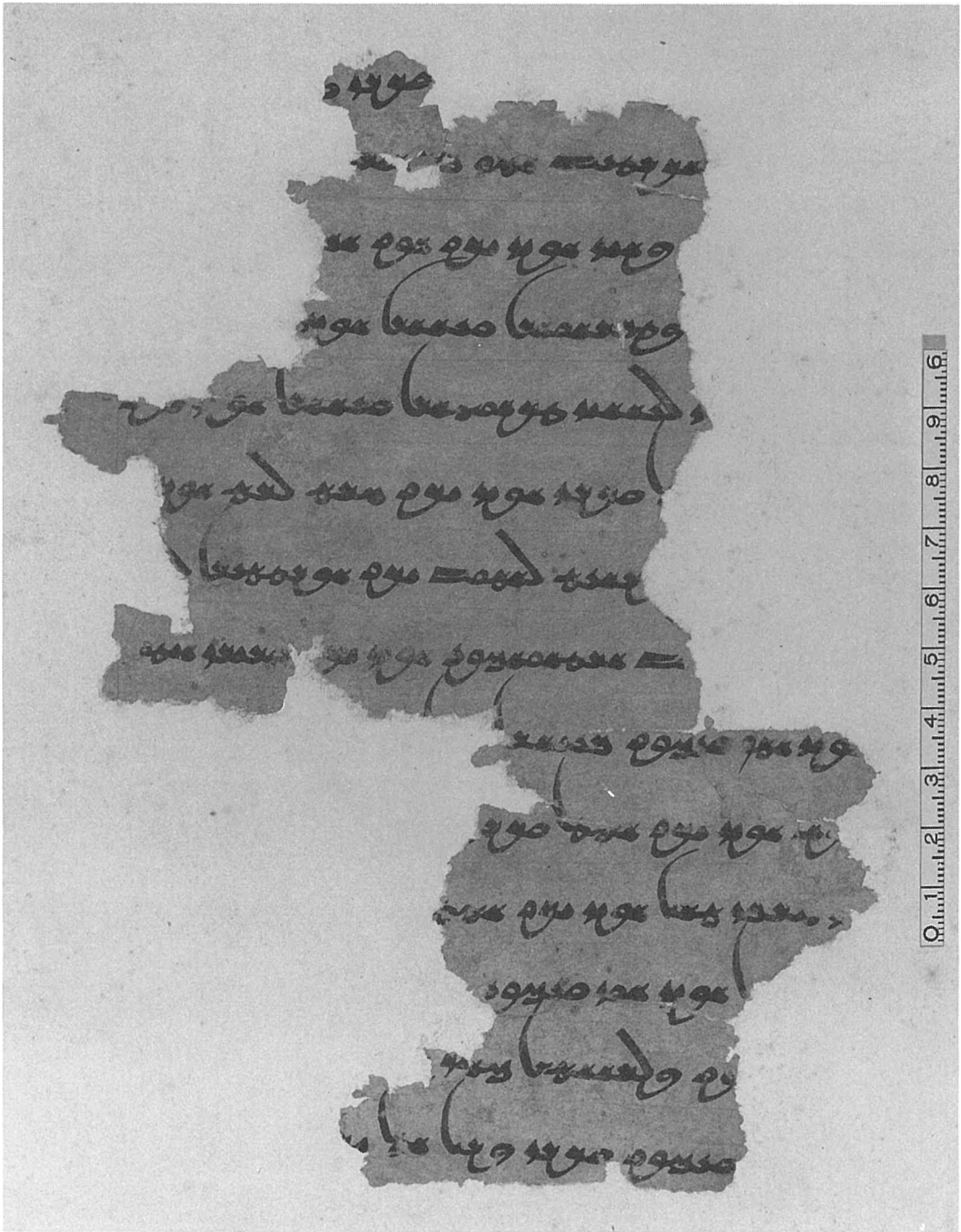
## 原典の読み下し文

「善男子、一切の声聞・縁覺・菩薩・諸仏如來の有らゆる善根は、慈を根本と為す。善男子、菩薩摩訶薩は、慈心を修習して、能く是の如きの無量の善根を生ず。所謂不淨・出息入息・無常生滅・四念處・七方便・三觀處・十二因縁・無我等の觀・暖法・頂法・忍法・世第一法・見道・修道・正勤・如意・諸根・諸力・七菩提分・八聖道・四禪・四無量心・八解脫・八勝處・一切入・空無想願・無諍三昧・知他心智、及び諸の神通・知本際智・声聞智・縁覺智・菩薩智・仏智なり。善男子……」

## 訳注

1 wkry (w)[ ]: 原文の対応箇所を特定できない。wkry は通常数詞とともに用いられ、「～種の、～個の」を意味する一種の数量詞で、普通原文に対応する表現がない。このテキストでも何度か現れるが、対応する漢字はない。しかし原文で見る限り、ここに数詞を伴う表現は期待されない。一方 wkry には、「zw wkry 『私』ということ」のように、先行する語の統語的機能を見捨てる意図を無視して意味内容だけを言語化する機能もあるので、例えば原文の「慈」を z'ry wkry 『『かわいそう』ということ』のように翻訳したのかもしれない<sup>5)</sup>。

2 s(...)r[ ]: s と読んだ文字は、β のようにも見える。先行する [šyr]'krtyh の復元が正しいとすれば、それは原文の「善根」に対応するであろう [BSTBL: 170]。そしてこの部分は後続する「所謂不淨・・・・」の訳であることになるが、筆者にはどのような語を復元すべき



か分からない<sup>6)</sup>。

3 [ ] p'zy : p'zy は p'ny とも読むことができる。この語は分綴されており、独立した語である。後続する部分は原文の「無常」と残画を参考にして、ほぼ確実に 'pw "[stnyh]と復元できる[BSTBL : 187]。従って p'zy は「出息入息」のソグド語訳の一部であることになる。ソグド語では p'zy ないしは p'ny という形式は、むしろ珍しい。従来知られている語としては、漢語の板からの借用語の p'n 「(ものを書きつける)板」、マニ経文献に在証される 'yw-p'zyy 「客」、及び「前面」を意味する p'z があげられる<sup>7)</sup>。このうちこの文脈で問題になるのは最後の語だけで、原文の「出る息(と)入る息」を訳す際に、「前向きに」を意味するその斜格形を用いたのかもしれない。無論従来我々が知らない語であった可能性もある。

3 'pw "[stnyh]「無常」：復元に関しては上記参照。

5 ['δry wkr] (y) δy'ny tk'wš'k wy'k 「三觀処」：ソグド語訳は漢語の「觀」を、「定を觀ずる」と意識している。

6 [ ] (t) wkry : (t) の読みは確実である。γrm δrm が「暖法」の訳であることは明らかなので、この部分は「無我等觀」に対応することになる。しかしどのように復元すべきか分からない。

7 (p) r'ym δ'mh : 「この世で」を意味する。pr'ym は珍しい形式で、他には『維摩経』のソグド語訳に2度しか現れない[GMS § 1470]。

8 [ ] (δ) [ ] h 'rt'w'spy : 前後の文脈からこれが「修道」に当たることはほぼ確実である。pr ... 'rt'w'spy šw- / wytr- は「・・・を修する」を意味し、漢文の「修行」に対応することが知られている[BSTBL : 21, 85]。従ってソグド語版を [prw r'](δ)[w]h 'rt'w'spy と復元し、「(正しい)道を修する」と翻訳していたとすることができよう。その場合次の行の初めに、動詞 šw- / wytr- の活用形も復元することになる<sup>8)</sup>。

8 [prw] ... ZKw wrzry 'ntw-[xs šw- / wytr-] : 行末で 'ntwxs を書き切れず、次の行に残りを書いたようだ。対応の漢文「正勤」から、この復元は確実である。筆者は、ソグド語版では「(正しい)道と正しい努力を行う」と翻訳されていたと考えたが、確信はない。

9 'mw wyspw Byz'k : 前後の文脈から「諸根」のソグド語訳であることが分かる。従来 Byz'k は「種」を意味すると理解されてきた[BSTBL : 41 ; MacKenzie 1984 : 388]。しかし文脈からは「種」の意味は期待されず、この解釈には不安があった。実際P 6, 49では「根」の訳に Byz'k が用いられており、Bailey によって提案された語源(Skt. bījaka-「種」)以外には、これが「種」を意味とする証拠は存在しない。いまここで再び Byz'k が「根」に対応する例が発見されたことにより、この語の語源はともかく実際の意味は「根」であったと結論してよいであろう。

10 [ ] (k)' : 原文の「七菩提分」に対応する表現の末尾であると考えられるが、どのような語を復元すべきか分からない。

10 ZKw 'št wkr [y 'xšywn'k r'δh] : 「八聖道」に対応するこの組合せは、ソグド語仏典に在

証される [BSTBL : 47]。

11 yrβy m'n : これは「多くの心」を意味し、原文の「無量心」のソグド語訳であろう<sup>9)</sup>。先行する部分は [ctβ'r wkr] (y) と補われるであろう。

13 [']pw pδr'mc : 「無諍」の訳 [BSTBL : 187]。

14 wyspw wkry prn 't (..) [ ] : これは原文の「諸神通」に当たる。「神通」の訳としては prn 't wrc'wny という表現が知られている。[BSTBL : 62, 191] 従って破損部を (wr) [c'wny] と補うことができそうだが、残画で見る限り最初の文字は w とは読めず、n ないしは z のように見える。2 番目の文字は k, r, あるいは β と読めるが<sup>8)</sup>、適切な復元形が思い浮かばない<sup>10)</sup>。

## 注

- 1) カラバルガスン碑文に関しては吉田 1987 : 52を、写真資料については、吉田(発表予定)を参照せよ。
- 2) ショルチュク出土と考えられるソグド語仏典の紙質に関する調査の結果、百済はその文書を7-8世紀のものとした[Kudara apud Sundermann 1989 : 12-18]。
- 3) ソグド語仏典一般に関しては、吉田 1991 ; 1993参照。そこにも報告しておいたように、ソグド訳の『大般涅槃経』には、別に2種類の資料が知られている。筆者はどちらも写本を実見したことがあるが、ここに発表する断片は、それらとは異なる写本に属する。残念なことに3つの資料は互いに重なり合う部分を持たないので、同一テキストの異なる写本なのか、互いに独立した翻訳であるのか決定し難い。筆者の印象で判断すれば、これらは独立の翻訳であった可能性が高い。なお、『大般涅槃経』には北本と南本の2種類の版があるが、ここに発表するものと、他の一点[吉田 1991 : 108, 15- i]ではそのどちらからの訳か分からない。しかし残りのものでは、貝葉本の端に書かれた丁付けから、北本からの訳であることは明らかであり、残りの2つも北本から訳されたと考えられる。
- 4) テキスト中の[角括弧]は完全な破損部を、(丸括弧)は部分的な破損部で、文字の一部が残っていることを示す。
- 5) wkry と次の行の一部を含む断片は、完全に写本の本体から切り離されてしまっているので、この断片をこの位置に置くこと自体が誤りなのかもしれない。
- 6) 文字 s と r の間の部分は、前述の wkry 同様切り離された断片に含まれており、写本のこの部分を補う断片ではないのかもしれない。
- 7) p'n に関しては、Sims-Williams & Hamilton 1990 : 30参照。'yw-p'zyy については、Schwartz 1990 : 200-07参照。この語は従来「わずかなもの」を意味すると考えられていた。なお Ragoza が przr と読む語も、「前向きに」を意味する斜格形の p'zy と解釈すべきであり、後続の p'xy (z) とともに全体で「前を向いたまま逃げ去った、後向きに逃げ去った」を意味するのであろう [Ragoza 1980 : 30, line 1, 44, line 15]。
- 8) ちなみに pr ... šw- / wytr- は「・・・を行ずる」を意味する [吉田 1984 : 80]。
- 9) yrβ が「無量」に対応する例に関しては、BSTBL : 187参照。
- 10) (ZK) [w wrc'wny] のように2番目の要素に、冠詞があったと考えることもできる。あるいは「神通」は prn によって翻訳されていて、冠詞は後続の「知本際智」に対応する表現の一部かもしれない。実際 prn は「通」の訳語として用いられる [BSTBL : 62]。一方 (nβ) [y'w'k] と復元して、prn 't nβy'w'k が

「神通」に当たっていた見なすこともできようか。nβγ'w'k の意味に関しては、BSTBL : 58参照。

## 略号

BSTBL : D. N. MacKenzie, *The Buddhist Sogdian texts of the British Library*, Acta Iranica 10, Tehran-Liège, 1976.

GMS : I. Gershevitch, *Grammar of Manichean Sogdian*, Oxford, 1954.

P = Pelliot sogdien, in : E. Benveniste, *Textes sogdiens*, Paris, 1940.

## 参考文献

羽田 亨

1958 吐魯番出土回鶻文摩尼教徒祈願文の断簡,『羽田博士史学論文集』下巻,京都,325-47頁.

MacKenzie, D. N.

1984 Some Pahlavi plums, *Orientalia J. Duchesne-Guillemain emerito oblata*, Acta Iranica 23, Leiden, 383-91.

森安孝夫

1990-91 『ウイグル=マニ教史の研究』,大阪大学文学部,第31・32合併号.

Ragoza A. N.

1980 *Sogdijskie fragmenty central'no-aziatskogo sobraniya Instituta vostokovedeniya*, Moscow.

Schwartz M.

1990  $\sqrt{\text{Waz}}$  and  $\sqrt{\text{Braz}}$ : 'guest' and 'formality' in Iranian, *Iranica Varia: Papers in honor of Professor Ehsan Yarshater*, Acta Iranica 30, Leiden, 200-07.

Sims-Williams, N. & J.Hamilton

1990 *Documents turco-sogdiens du IX<sup>e</sup>-X<sup>e</sup> siècle de Touen-houang*, London.

Sundermann, W.

1989 First results of cooperative work between Ryukoku University and the Academy of Science of the GDR on Buddhist Sogdian Turfan texts, *The annual of the Institute of Buddhist Cultural Studies Ryukoku University* (『龍谷大学仏教文化研究所所報』,12),12-18.

吉田 豊

1984 ソグド語の『究竟大悲経』について,『アジア・アフリカ言語文化研究』,27,76-94頁.

1988 カラバルガスン碑文のソグド語版について,『西南アジア研究』,28,24-52頁.

1991 ソグド語仏典解説,『内陸アジア言語の研究』,7,95-119頁.

1993 ソグド語仏典解説補遺,『内陸アジア言語の研究』,8,135-38頁.

(発表予定) 無常を説くマニ教ソグド語文書——京都大学所蔵の写真資料から——,『オリエント』.

(神戸市外国語大学)